
ニヤリングフィーバー

コンドム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニヤリングフィーバー

【Nコード】

N9188D

【作者名】

コンドム

【あらすじ】

気まぐれで風俗へ行ったら・・・

風俗店に行つて

もうじき福岡を去り、関東に行くことになるので、せつかくだから何かこの地に思い出を残そうと思つて考えた拳句、ぼくは風俗に行くことに決めた。

友だちとわいわい騒ぐのもいいけど、やっぱり一人だけの特別な思い出が欲しかったのだ。

それに、あっちに行く前に、女性を知りたかった。

素直にいえば、セックスがしたかった。してみたかった。

そして、引越しの三週間あまり前の夜、それを決行した。言つまでもないと思うが、ぼくは童貞だった。

自転車で近くの駅まで行き、そこから電車に乗つて全国有数の歓楽街へと向かった。

電車に乗っている間、ぼくは一人緊張していた。

無理もない。女体なんてものは母のそれを除いては全くの未知みたいなもんなのだから。

手にむやみやたらと汗をかき、地下鉄の暗闇を窓から眺めた。

10分くらいで着いた。

駅から出ると、嬌声がぼくを包んだ。

賑やかな街だ。

酔つ払つたサラリーマンたちが肩を組んでよたよた歩き、物騒なのがウロウロしている。

ぼくは、ネットで調べた格安の店へと向かった。

店に入るのはかなり緊張した。

なかなか入ることができなくて、店の前を右往左往していると別の男の人が悠々と入つていったので、ぼくもそれに続いた。

入ると、男が金を渡すように言ってきた。

ぼくはお金を渡した。

こっちだ、と男はぼくを部屋に案内した。
女の子は選べないのか、とぼくは聞いた。
格安なんだから当然だ、と男は言った。
当然なのか、とぼくは思った。

部屋の前に来ると男はごゆっくり、と言って去っていった。

ぼくは生睡をのみ、部屋のドアを開けた。

いらっしゃい、と声がかかけられ、おろおろと入っていくと、女の子がベッドの上にちょこんと座っていた。可愛いパジャマ姿だった。よろしく、女の子は頭をぴよこんと下げ、立ちすくむぼくを見上げ、そして一瞬怪訝な顔をした。

ぼくはその顔に見覚えがあった。

風俗店に行つて（後書き）

自分のブログでつらつら書いている小説です。

まあ小説っていうか、実際は妄想みたいなモンなんですけど、これからもちよくちよくアップしますんで、よかったら読んでやってください。

にょほほほ

小学生のときだ。ぼくには一人の好きな女の子がいた。

その子とは、5年生と6年生のときに一緒のクラスになって、よくとなりどろしの席になった。

さらさらの長い髪を伸ばしていて、笑うとえくぼができる子だった。

初めは、なにかでいがみ合っていたようだけど、隣同士でこづきあっているうちに次第に仲良くなっていき、「好き」という感情をぼくがはじめて抱くようになったのだ。

それは初恋、などと言ってしまおうと、なんだか背中がむずむずするけれど、やっぱりそれは初恋だった。

すっかり仲良くなった6年生のとき、ふざけてお互いの机に色つきサインペンで落書きしあった。そのあと先生にこっぴどく怒られて放課後二人で残ってクレンザーで消した。

それがぼくの中に残っている小学生のときの一番きれいな記憶だ。彼女の絵はとてもへたくそだった。

とてもじゃないけど、どれもぼくの認識の範疇をこえている絵ばかりだった。

それでも、秋の夕焼けに茜色に染め上げられた髪少女はぷくうと頬をふくらまし、机の上に加えがかれた角を生やした小型エイリアンみたいな生物をピカチュウだと言い張るのだ。

卒業式には一緒に写真をとった。

その子のおばあちゃんがとってくれた。

小学生相手にそのおばあちゃんは、「ほれほれもつと寄らんと」とはやし立てて、もっつおばあちゃん、と怒った彼女と対照に、ぼくはかなりどきまぎした。

その後、ぼくらは別々の中学に進学した。

ぼくは市内の有名私立中学に、彼女はその校区の公立中学校に。それ以来顔を合わせたことは一度もないが、その公立中学校に進んだ男友達と偶然再会し、ラーメンを食べながら話し込んだときに彼女の話があがって、彼女がなかなか学校に来ていないということを知った。

会って話してみたかったけど、ぼくは彼女の住所を知らなかったし、電話番号も知らなかった。

年賀状出すときに変に恥ずかしながらちゃんと聞いとけばよかった、とぼくは少し後悔した。

それからぼくはエスカレーター式にその私立高校に進学し、部活に没頭し、別の女の子を好きになったりする中で、ぼくの中の彼女の存在は薄れていき、遠い思い出の一部になった。

記憶の中の彼女の顔も同様に薄もやがかかっていき曖昧になっていった。

けど今、そのもやは晴れて記憶の中の彼女の顔も明確に浮かび上がるようになった。

ぼくは確信した。

髪の色も変わり、声の高さも少し下がったみたいだけど、間違いない。

今、このぼくの目の前でベッドに座り、決まりの悪そうな顔をして頬を掻いている少女は、かつてぼくが好きだった女の子にちがいない。

しょしょしょ

ぼくは確信した！

・・・のはいいものの、驚いたり感慨がわいたりは一瞬だけのこと、ぼくはすぐに現実に引き戻された。急を要する難題が目の前に迫っていたのだ。

(で、これからどうしよう・・・)

ぼくはこれからの身の振り方に、ものすごく困っていた。

もともと遠路はるばるやってきたのは女を買うのが目的なのだが、その女というのがかつての同級生で、さらには自分の元「思い人」だとは思ってもみなかった。こんな偶然、予測しろというほうが無理な話だ。

・・・どうしよう。

ぼくは完全に硬直してしまった。一応思考はめまぐるしく動き回っているが、なんの解決も出ない。こういうとき、いったいどういうリアクションをとればいいんだ・・・

もしこれが道ばたや公園とかでの再会だったら、「おー久しぶりじゃーん」などと言って屈託もなく再会することができるのだから、場所が場所で、状況が状況だ。

フーゾクで再会？

ははは、どうすればいいんだ。だれか助けてくれ・・・

一方、彼女の方も一目見るなりぼくと分かったらしく、同じく身の振り方にもものすごく困っているようだ。ベットに腰掛けたまま、口をまぬけに半開きにして、目の動きがとまっている。

他の部屋からギシギシバタバタとなにやら不穏な音が聞こえる中で、ぼくたちは二人呆然と見つめ合っていた。

石のような沈黙が刻々と続き、ぼくは例にない量の冷や汗をかいていた。

そしてこの虫も殺しかねない沈黙に耐え切れなくなったぼくは気がつくのと、あー、と声を伸ばしていた。とりあえず沈黙はなくなつたが、自分がとことんマヌケに思えた。

すると彼女も同じように、あー、と声を伸ばしだした。見るも無残、ものすごいマヌケな顔をしている。

「あー」

「あー」

初めは音程の異なっていた二人の「あー」も、いつしかきれいにユニゾンして部屋を満たした。

そして思った。

・・・いったいぼくたちは二人してなにをやってるんだろう。

「ひ、ひさしぶりい」

あー、と伸ばすのが苦しくなってきたころ強ばつた笑顔で彼女がびしっと手を上げた。

「お、おー久しぶりじゃ、じゃーん」

負けじと強ばつた笑顔でぼくはびしっと手を上げた。

「げ、元気してた？」

「と、とりあえず。そっちは？」

「ぼ、ぼちぼちです」

「そ、そつかあ」

「そ、そっだあ」

沈黙。

「ど、どうしたのこんなところに？」

「い、いや・・・み、道に迷って、気がついたらなんか変な店に
紛れ込んで、男の人にお金を渡したら、この部屋に案内された、
うん、そう」

「し、しらじらしいウソは別に、言わなくてもいいんだよ」

あ、あははは、ときこちなくぼくたちは笑いあつた。

しゅしゅしゅ

痛いような沈黙が再び続いたあと、ふっきれたようにぼくたちは話し始めた。

ネタはつきることは無かった。

だけど、ぼくたちがした話は小学校のときのことだけで、今の自分たちの話は一切しなかった。彼女のこの境遇　　ぼくは気になつたけれど、聞くことはやめておいた。

彼女も自分からその話はしようとしなかった。

そして沈黙が少しつづくと、なにかあせつたように小学校の教師たちのものまねを繰り返す彼女に、ぼくは少しムリをして笑った。財布を取り出して2人分のジュースを廊下の自販機で買って部屋に持っていくと、彼女は、よっふとつばら、と言って迎えてくれた。財布とジュースをベッドの頭のほうの先にある小さな棚においてぼくたちは再び話し始めた。

ところどころ、なんだか少し危うげな感じはあったけど、それでもぼくは楽しかった。

狭い風俗の部屋の中、ベッドの上のぼつたぼくたちはあぐらをかいて座りこみ、身振り手振りを交えての小学校の思い出話に笑いあう中、ぼくはその時間がまるで修学旅行の夜であるかのような錯覚を覚えた。

時間はあっという間にすぎていき、「あ、そろそろ時間切れるね」と言われたとき、初めてここが風俗店であることを実感した。

「アドレス教えてくれない？」

別れ際にぼくは勇気を振り絞ってきいてみた。

女子に自分から進んでアドレスを聞くのは初めてのことだった。

だから、顔が妙にこわばってしまい、あはは、と彼女に笑われた。

「変な顔！」

人の顔を指さす同級生。

「な、なんだよもう。」

「ごめんごめん」

「じゃあ人の顔を笑った罰として教えるよ」

「そんなことで罰？」

「いいから教えるって」

むっとしながらぼくがケータイを取り出すと、

「あー、ごめん。それはムリ」

と彼女が腕をクロスしてバツを作った。

「あたしケータイ持ってないから」

申し訳なさそうな顔をしている。

「そっか」

「うん」

5秒沈黙。

その間、彼女はぼくの足元あたりに目をふせていて、ぼくは何か言葉をかけたかったけれど思うように口に出てこなかった。

「それじゃあ、帰るから」

出てきた言葉がこれだった。

「うん」

「じゃあな、山口」

そういうと、彼女はうつすらと悲しげな顔を浮かべたような気がした。

「うん。じゃ」

彼女は、楽しかったよ、と言って笑いながら手を振った。

さっきの悲しげな顔は、きっとぼくのうぬぼれから来る勘違いだろう、と部屋を出るときぼくは思った。

店を出るとき、ぼくを部屋に案内した男が声を掛けてきた。

「よお、君こういうところは初めてなんだろう？」

「ええまあ」

「雰囲気からしてそうだったもんな。で、どうだった？店でもかなり可愛い方の子を当ててやったんだぜ」

「・・・人生で一番のサプライズでした」

しかし、ぼくはチエリーボーイのままだ。

駅への道すがら、駅の構内に入ってもぼくは山口あかりのことを考えていた。

風俗嬢になるにいたった彼女の境遇、そんなことを彼女との昔の思い出がちらほら浮かぶその頭であれこれ考えていた。

まったく、それにしてもなんて一日だ。いや、もう日付は変わったのか。

駅の時計は12時半あたりを指していた。終電まであと少し。

・・・彼女はぼくにケータイのアドを教えなかった。

ケータイを持っていないと彼女は言ったけど、そんなことを信じるほどぼくは素直な人間じゃない。

あれは、もう会わない、ということだろう。

昔の友人に今の自分の姿を見られるのが苦痛なのだろうか、そうかもしれない。

とにかく、ぼくがもう一度あの店に行き、案内の男に山口あかりのいる部屋に連れて行け、と言って大金を握らせない限りぼくは彼女に会えないだろう。そして生憎ぼくは今晚で金欠になった。財布には電車代くらいしか残ってないし、家にも金はほとんどない。

しかし、それでいいのかもしれない。ぼくはどのみち3週間でこの地を去る身だ。いまさらここでなにかをしようと言う気にもならない。

そうだ。もし残りの三週間で彼女と深い仲になったとしても、結局ぼくは関東に行かなければならない。そしてそれつきりだ。恋愛

ならあつちに行ってもできるんだ・・・なんてどうも自信過剰なことを考えていることに気づき、なんだか自分がかくだらなく思えて、ぼくはさっさと切符を買って帰ろう、と販売機の方へ進める足を速くした。

とりあえず、ぼくはもう山口あかりと会うことはないだろう。ぼくが小学生のとき淡い感情を寄せていた少女に会うことはもうないだろう。それが彼女の望みかもしれないし、一番良い方法なのかもしれない。

それよりも、東京へ行く前になって小学生時代に馬鹿みたいに真摯な感情で見っていた女の子に再び会うことができただけでも、ぼくは運命に感謝する必要があるだろう。

じゃあな、あかり。

心の奥でそつとつぶやいて、販売機の前にたったぼくはポケットに手を伸ばした・・・が、ぼくの手はポケットの中の空気をつかんだだけだった。

・・・え？ あれっ？ あれれれれ？

体のあちこちを手でパンパン触ったのち、ぼくはまぬけに口を開けて、つぶやいた。

「財布忘れた」

しゃしゃしゃ

「は？待ってた？ここで？ずっと？ちょよ、今何時よ」

「5時」

「5時！それまでずっとこの寒い中ここで？馬鹿じゃないの？財布忘れたなら中に取りに来ればいいじゃん」

「いや、入りづらかったから」

正確には、店のそばにやくざみたいなのがたむろしていたから、怖くて近づけなかったのだ。

「だからってこんな時間まで・・・」

そういった後あかりは、くっくくくく、と小刻みに肩を揺らしだし、すぐに大きな声をあげて笑い出した。ゴミを片付けていた近くのバーのお兄さんがびくつと驚いた。

「バカ！バカ！バカ！バカだ！」

ぼくは決まり悪く、腹を抱えて、死ぬ、死ぬと叫ぶ彼女を見ていた。

ぼけーっとこちらを見ていたお兄さんが気を取り直してゴミ片づけを再会し、片付け終えてもなおひーひー笑い続ける彼女に、ぼくは逆にあきれ返った。

「ねえ、もういいからとにかく財布・・・持ってたんだろ？」

ようやく笑いが収まったあかりは持っていた安っぽいバッグからぼくの財布を取り出した。

「はい、これ」

どうも、と言いながらぼくがそれを取ろうと手を差し出すと、あかりはすかさずそれをひょいっと上に上げた。

「なんだよ」

「あたし、てっきりあんたが取りに来ないから歩いて帰ったのかと思って、わーこの財布もらっちゃおー、ラッキーって思ったんだけど」

「……素直なのはいいことだけど、残念ながらそこには500円くらいしか入ってないんだよね」

そう言って、彼女が握って上に挙げている財布を掴もうとすると、またひらりとかわす。

そして、

「あ、500円も入ってるんだ」

見ると彼女は嬉しそうな顔をしていた。

嫌な予感がした。

「ねえ」

彼女が口を開いた。

「これ、店の部屋におきっぱなしにしてあったんだよね」

「そうだけど」

「その部屋にはあんたが帰った後もあたしがいたわけだよね」

「そうだけど」

「それであんたはそのあたしをここで待ってたんだよね」

「そうだけど」

「自分の財布を持っているあたしを待ってたんだよね」

「そうだけど」

「じゃあもしあたしがわざわざその財布を持ってこずに部屋に置きっぱなしにしてたら、ここで待ってた意味はないんだよね」

「そうだけど」

「でも今ここに財布はある」

「そうだけど」

「だれのおかげでここにあるのでしょうか」

「……あなたです」

「これと、これ。あ、いや、やっぱりこっち」

498円になります。がちゃん。ちん。毎度、ありがとっぎした。

コンビニを出たとき、ぼくの財布には13円しか入っていないなっていた。

「いや、ありがとうね、ほんと。新商品で食べてみたかったんだ、これとこれ」

「ははは、鬼畜だの人間失格だのレイプ魔だの、大声で叫ばれたらそりゃあ買ってあげたくなるよ」

そう言っでぎろりと睨んでやると、

「それもまた、女の武器というやつだよ」

と、ばんばんとぼくの背中を叩きながらうししと笑う。なんて女だ。

「これで電車で帰れなくなった」

「親にもらった足があるでしょ」

ぼくはふと小学生の卒業式にあかりの両親はいなかったことを思い出した。

しかし、ずいぶん簡単に言ってくれる。徒歩だと何時間かかると思っているんだ。それにしても、ビニール袋をそんなに振り回したら中のケーキ菓子が崩れやしないか？

その疑問を口に出す前に、彼女はビニール袋の中を覗いて、げつ、とつぶやいた。

ぼくたちは二人、朝焼けに近づく歓楽街の裏路地を歩いていた。

あたりはとても静かで、ところどころ思い出したように設置されたランプにほんのり照らされた狭い路地の間に二人分の足音が均等に響いた。

4、5分前からぼくたちはお互いに言葉を発しなくなり、申し合わせたように黙り始めた。

だけど、それは悪い沈黙ではなく、むしろ体を包んでくれるような、居心地の良い沈黙だった。外の寒さの鋭さにさんざん痛めつけられて鈍くなりきった皮膚の感覚はそれによっていっそオブラートなものとなり、逆に肺へと流れていく冷え切った空気はぼくの全身

の神経を、どこか危うく、撫でるように刺激した。こんな感覚は久しぶりだ。今ここで感じるまで、すっかり忘れていたほどだ。

「そういえば」

突然あかりが発したその言葉は吐く息の白さといっしょにしばらく宙に漂ったようだった。

「髪」

「え？」

「坊っちゃん刈りじゃなくなったね」

ぼくは小学生のときまで、坊っちゃん刈りだった。床屋のおじさんがいつもその髪にしたからだ。そして中学生になって、その床屋のおじさんに雑誌で見た違う髪型を頼んだ。

「そりゃあ、ね」

「あっちの方がよかったのに」

「・・・マジ？」

「あっちの方がおもしろい」

「そういう問題なんだ」

「だってかっこつけてもどうしても似合わないやつっているじゃん」

「・・・」

失礼な女だ。相変わらずだ。

ぼくの前を二歩ほど先に進んでいたあかりはぴたつと突然立ち止まった。

路地裏のさらに奥の方に進み、どこか分からない入り組んだところにぼくたちはいた。

そういえば、なんでぼくはあかりとずっと歩いていたんだろう。

そこで初めて疑問に思った。

そうだ、もともとコンビニを出たあと、別れてぼくは帰るつもりだったんだ、一人で、歩いて。

それなのになぜぼくはあかりとそのあとも歩いていたんだろう。

そしてなんでこんなところまで来たのだろう。

で、ここはどこなのだろう。

あたりを見回すと、狭い路地の左手には何かの事務所のあとらしき廃墟が、そして右手には漫画みたいな一目見て分かる安アパートがあった。それにしてもひどいボロさだ。

そして不思議なことにあかりはその安アパートの入り口手前で立っ
っていて、今ぼくのほうを向きなおした。

「・・・あがっていきなよ」

「え、なに？」

「お茶でもだすよ。5時まで待ってたバカに敬意を表して」

しえしえしえ

そのアパートの歩くごとに悲鳴のような音をたてる階段を上った2階にあかりの部屋はあった。そして、その部屋の薄汚いドアの前に立ちカギをバッグの中からごそごそ探し出す彼女の一步ほどそばにぼくはいて、不思議な気分ですれを眺めていた。

あった、と呟いたあかりはすぐさま取り出した鍵でドアを開けて少し中に入り、入り口付近でなお佇んでいるぼくに向かって、「はやく入りなよ」と言ってぼくの手首を掴んで部屋の中へ入れた。

「狭くて汚いところだけど、まあゆっくりしてよ」

どうやら、彼女が言った汚いは謙遜のようだが狭いは事実のようだ。

キッチンも含めて5畳か6畳ほどだろうか。床はもちろん畳敷きで全然手入れはされていないらしく縫い目がボロボロであり、その上はまあ比較的整理されている。家具は少なく、小型のタンスと鏡台程度しかない。しかし、この狭い部屋はその少ない家具にスペースの半分あまりを削られていて、実際移動することができるのは、寝ることがやっと出来る程度のものであった。

そして当然、テレビもラジオも電話もその部屋にはなかった。

しかし、代わりに大量にあったのが、

「すごい本・・・」

とぼくが思わず呟かなくてはならないほど大量に積まれた文庫本だった。隅にどーんと積まれたそれらは一つの山のように部屋にそびえているみたいで、ダンボール一つ二つ程度じゃ到底収まりきらないであろう分量だ。

「ブックオフとか行ったらさ、こういう文庫本って一冊百円とかで売ってるからね、だから暇なときは小説買って読むの」

なにしろテレビもケータイもないからね、とあかりは笑いながら言った。

・・・どうやら、ぼくは勘違いをしていたようだ。

彼女はうそをついたのではなく、今時めずらしく本当に携帯電話を持っていなかったのだ。

なんだか肩透かしを食らった気分だが、少し嬉しいと感じている自分がいる。

「ああ、なるほどねえ」

と、とりあえずつぶやく。

それにしても、テレビもケータイもない生活、すごいな。

それから、あかりの煎れてくれた味の薄い緑茶をすすりながら、ぼくたちは小説について語り合った。

ぼく自身、それなりに本は好きで、現代文の科目はちょっと得意だったりする。

話すにつれて、小説に関するぼくたちの趣味はかなり違うことが分かってきたが、一点アメリカ文学がともに好きだということが分かって盛り上がった。

フィツジェラルドとO・ヘンリー、あとステイブン・キングが好きなのだと彼女は言った。

ぼくも同感。大いに同感。

わかるわかる〜！と叫んだ。

特に、フィツジェラルドの『華麗なるギャツビー』を読んだことは、ぼくにとって高一の夏の最大にして最高の出来事だった。部活の先輩から告白を受けたのは、悪いけどその次だ。

みたいなことを言ってみると、彼女は驚いていた。

「え、あんた告白なんかされたことあるの？」

まあね、と若干得意げなぼく。

返事を待たせている間に、別の男になびかれてしまったという悲劇的結末を除いてそのことについて語ってやると、彼女は「へえ」と一見感慨深そうな、別の見方からすると、何も考えていなさそうな響きのつぶやきをもらし、ぼくの顔をぼんやり見ていた。

窓から見える空はいつしかだいぶ明るくなっていた。

あかりの「へえ」からなんとなく沈黙が続き、なんだか手持ち無沙汰になったぼくはぬるくなつた味の薄い茶を口に持つていきながら、ここで彼女の身の上について訊いてみるのはやっぱりまずいかな、などとふと考えた。

実際、あかりがこの狭いぼろアパートに一人暮らししてしかもフーゾクで働いていることからして、訊かずともなんとなくその経緯は想像に易いものだったが、やっぱり自分からそのことを切り出すわけにもいかない。・・・訊かないままでいよう、その話は触れないままでいよう。ぼくは店の中での昔話に専念しようとするあかりのどこか焦つたような姿を思い出してそう思った。きっとそれが一番いいんだ。

しかし、お茶を飲み干す間に固めたこの決意はあっけなく無駄なものになった。

「あたしね・・・」

と突然彼女が語り始めたのだ。ぼくは片膝を立てて座りながらぼつりぼつりとつむがれていくあかりの言葉を黙って聞いた。

「幼稚園だつたところに、お父さんとお母さんを交通事故でなくしておばあちゃんにずっと育てられてきたんだよね。だから参観日も運動会の日もいつもおばあちゃんが来てくれていた。卒業式の日もおばあちゃんが来てくれて、あっ一緒に写真とってもらつたの覚えてる？」

ぼくは首を縦に振つた。あのときのどぎまぎした感じは今もなお忘れていない。

「それでね」あかりは畳の目をほじくりながら言葉をつづけた、「もともとお父さんたちが生きていたところから家は貧乏でね、事業で失敗した借金が山のように積もつていて、二人の保険金は全部その借金の返済に回して、それと住んでいた家も売つてようやく借金が返せたの」

なんだかすごい内容である。テキストな相槌もつてないような空

気なのでぼくはうなづくだけである。

「そのあと、おばあちゃんは小学校の校区にある古いアパートを借りて、そこで二人で一緒に暮らし始めたの。おばあちゃんの年金だけが命綱なんて貧乏な生活だったけど、ちゃんと小学校にもいけたから良かった。だけど、中学校に入ってから2年くらいたったある日、朝おばあちゃんを起こそうとしても全く起きないのよ。いくら叫んで揺さぶっても。それで、119番してお医者さんに来てもらったから老衰だって言って、あたしは一人になった」

ぼくはいつかラーメン屋で昔の友だちが言ったことを思い出していた。

(山口がアイツ全然学校来なくなったんだよ。なんか不登校っぽい)

「それから」

とつなげられたあかりの声で、頭の中で再生されていた記憶の中の友だちの声はかき消された。

「それから、年齢をごまかしているいろいろ働いた、学校に行かずにそれで17になったくらいからあのお仕事を始めた」

「・・・国の補助とかは受けられなかったのか？」

「まあね。色々あってね」

「・・・そっか」

寝不足の重い頭であまりに重すぎる話を聞いてしまったぼくはすっかりしよげかえった気分になった。少しの沈黙の後あかりは、あー、と大きく背伸びをした。

「まあ、こんなところ！あー言ったらすすきりした。これで話するとき気まじくならないで済む」

見ると、あかりはすっかり元の笑顔に戻っていた。

その顔をみたとたんほつとしていている自分がいて、単純なやつめ、と心の中で自分にののしった。

まあいいや、とりあえず・・・

「ん？お茶？おかわり？」

「おかわり」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9188d/>

ニヤリングフィーバー

2011年1月16日14時38分発行